



20th CENTURY

ジロドゥ
クレー



20th CENTURY

世界文学全集

20世紀の文学
世界文学全集

23

ジロドウ

天使とのたたかい
シュザンヌと太平洋

クノー

人生の日曜日
きびしい冬

集英社

Auteur : Raymond QUENEAU

Titre : LE DIMANCHE DE LA VIE

© Editions Gallimard 1952

© 1965 Shueisha



世界文学全集

23

ジロドゥ・クノー

昭和四十年八月二十八日 印刷

昭和四十年九月二十八日 発行

訳者 中村真一郎・白井浩司・

大久保輝臣

発行者 陶山 巖

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 文勇堂製本工業株式会社

本文用紙 日本パルプ工業株式会社

表紙 東洋クロス株式会社

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

電話(265)六一一(代表)

振替 東京一五六五三

定価 五二〇円
(落丁・乱丁は本社で
お取りかえいたします)

目次

ジロドウ

天使とのたたかい

シュザンヌと太平洋

クノー

人生の日曜日

きびしい冬

クノーとジロドウの世界

中村真一郎訳 五

中村真一郎訳 一六三

白井浩司訳 二九五

大久保輝臣訳 四五三

白井浩司 五三七

ジ
ロ
ド
ウ

天使とのたたかい

第一章

わたしは用意ができていた。

重大な瞬間、重大な時期に対してでもこれほどの用意はできないだろう。例の、世代間とか大陸間とか民族間とかに起こる危機を、わたしはいつもみぬいてきた。その危機が実にはつきり予知できるので、わたしはそこから自由になる必要を感じるのだ。本能が危機の接近を告げるたびに、わたしは自分の職業や趣味に終わりがきたことを知って、精神的支柱が残らず倒れるにまかせろ。わたしはもう自由の予約購読を更新しない。愛や、好奇心や、雑誌そのものの予約購読をさえ。雑誌の編集部はわたしに手紙をよこす。伝説のカリブソンの島の位置の決定、あるいは判事の一人しかいない裁判所の批判といった、最近の呼びものの記事にわたしが憤慨していると思ったのだ。編集部は弁解する。だが、そんなことではないのだ。数週間すると、戦争とか経済恐慌とかヨーロッパの混乱とかが起こるからだ。わたしはセーヌ川の伝馬船の

汽笛とかゆきずりの女の顔とかいう無料の予約購読をさえことり、約束も別離もやめる。たとえ悲しみが抗議しようとして、ふだんのときなら悲しみに向かっていうことも、わたしはいいわない。だから、夜も見張りをにつけてきた歳月が、平和な歳月を麻痺させたり耐えきれなくさせたりするとき、そしてまた苛々^{いらだち}したりうんざりしたりした人たちをそうした歳月が危機や戦争に送りこむとき、わたしは天変地異や人間の闘争に直面することになるのだ。荷物もなく、過去もなく、カリブソについての特別なイメージもなしに。

今度は、わたしの方式が完全であることに自信があった。

人間も物も向こうからすすんでわたしを離れ、わたしから脱落した。わたしの車は先週盗まれてしまった。幸福だった時期の髪を、短く刈ってもらいに行った床屋の前で。わたしとは逆に長髪で、絹裏のベージュの外套を着た、背の高い若い男が、自動車の型やナンバー・プレートやさらにはヘッド・ライトまで調べているのを、新聞売り場の女の売り子は見ていた。彼女はあやしまなかった。男が車をひきとりにきたと思ったのだ。スターターをひと踏みしただけで車は動き出したのだから……わたしにいわせれば、泥棒はそれほど苦労するまでもなかったのだ。もし彼が前を歩いてちよっと合図をすれば、車のほうから彼について行ったことは確実なのだ。絹裏の人間との生活を確保するために物たちがどういう手を使うか、わたしは先刻承知していた……その翌日、わたしの犬がいなくなった。門番部屋の田天井の下で、わたしが散

歩まえ彼に首輪をつけていたそのとき、彼は突然に頭をそむけ、いやだといった。そしてわたしの脚のあいだから逃げた。わたしは膝を締めた。彼はわたしの愛撫を、激しく押しつけられたわたしの最後の愛撫を、全身に受けた。それから彼が道を走って逃げて行くのをわたしは見た。主人を愛し、自分が狂犬になったのを感じた犬は、そんなふうには消えるものだよ、とある友人がわたしにいった。その例は間違っている。おそらく、犬は、やはり愛からだとしても、むしろ主人が冷たくなったから、全速力で逃げたのだ。

アニーのほうは、男が純潔になったので逃げたのである。彼女は三月前から一ミリずつゆっくりと逃げて行つた。愛する男を自分のものにした女にとって、つまり唯一の胸囲、唯一の背丈、唯一のリエゾンのしかた、食べ方、飲み方、くしやみのしかた、海とか火事とかの眺め方、等々をもった完全なる男を自分のものにした女にとって、その男が突然に別の肉になったことに気づくのはつらいものだ。なぜなら、問題だったのは、ほんとうは純潔ではなかったのだから。わたしの肉体はまだ従順だったが、しかし彼女はそれがもう同じ肉体ではないと感じたのだ。それは肉体的思ひ出のない肉体、肉体的共犯関係のない肉体になった。しかもその記憶喪失がわれわれの愛の純粹さと不純さとを分けた。アニーの名誉のために、だが彼女にとって不名誉なしかたで。彼女は自分が愛身に立ちあっているのを感じた。彼女が抱き締めている愛する夫を、運命の敵意が木や金属に変えた。交接と植物の受

精とは精神的には等しくはない。彼女は愛身をとどめるのに役立つあらゆるもの、嘆願や愛情を使つた。このわたしの内に溶けた百万人目のパルシファルに對して、彼女はその献身を、その寛大さを十倍にした。彼女のなかの肉でないすべてのものがわたしを肉につくりなおすために闘つた。彼女はわたしの憐憫に訴えるために、彼女の美しさ、彼女の幸福な女の顔を断念しさえした。むきだしになったこの身体に、憐憫からわたしが働きかけるように。彼女の微笑ひとつひとつの最初の皺によって、彼女の眼差しひとつひとつの中に炸裂する最初の血管によって、彼女はわたしのうち破りがたい放心を消そうと試みた。その放心に比べればまだわたしの眠りは現存であり注意であつた。わたしが彼女を裏切つたのは明らかだつた。裏切りには普通の裏切りの低級さがなく、わたしに別の恋人がいることを想定させさえしなかったが、しかし裏切りが高級だからといってその苦しみがわずかでも薄らぐものではない。高級な苦悩とはやりきれない苦悩の謂である！ なんかずく、彼女の苦悩はそのうえに屈辱をもたらしした。というの、彼女の傍にいながら、わたしは彼女をすっかり忘れていたのだから。わたしの意志に反して、わたしの身振り、わたしの言葉は、彼女の言葉、彼女の身振りに応えた。ただいつも一秒遅れて。わたしは光が彼女の世界にとどくの一秒かかる世界にいたのだ。それは人間の力を越えた距離である。わたしの速達は、わたしのまなざしやわたしの返事に比べれば——わたしの愛撫についてはいうまでもないが——即

時の反射運動だった。去年の手紙も、彼女がそれを読み返すとき、同様だった。それは昼にきて、朝にきて、翌日もきた。ところがわたしの現存のほうはすでに過去と距離とのあいだでたえがたい状態になっていた。彼女がわたしたちの愛と呼ぶものの記憶は、わたしのうちではその愛情そのものから離れてしまった。われわれの関係の思い出はまだわたしのうちで生きてはいたものの、しかしそれは旅行の思い出、春の思い出、孤独の思い出などという特別な見出しとしてでしかなかった。わたしは事実軽やかだった。事実幽霊だった。彼女は靈魂を呼びもどすときのような術策によってしか、わたしの個人的生活からわたしたちの共同生活へわたしを呼び返せないことを感じていた。わたしたちの年齢や時代のちがいの残酷な刻印は、わたしたちの結合に非人間的な側面を与えていた。彼女は精霊と寝ていた。わたしのほうは牝鹿と。彼女は縮まってたえざる警戒のうちに寝ていた。上向きに、そして彼女と寝ようとするとき、わたしをいつも私生児の紋章に比べさせた、あの斜めの位置にではもうなく、横向きに。壁に張りつき、その無慈悲な壁によって逃走を妨げられて。しかし顔だけに厚く柔らかな毛布をかぶって。わたしのほうは長々と寝ていた。彼女のうちに恐慌をひき起こす唐突な動作はいつさい気をくばって避けながら。わたしが一九一四年にマルシェの城の厩舎で、ほんとうの牝鹿といっしょに寝ていたときのようにである。彼女が畏でとらえられたのは、ドイツ人の獲物にならないためであり、かつ大佐の言葉によれば、彼女

がわれわれフランス人と運命をとにもするためであった。彼女もまた壁にからだを押しつけていた。彼女はわたしが背囊をとり、銃を銃架代わりの秣棚^{もくばう}にかけ、革帯の留め金はずすのを、わたしが服を脱ぐのを聞いているアニーと同じ恐れをもって聞いていた。わたしはドアの鍵をかけに行った。わたしたちは二人だけになった。それから、彼女の寝わらの上に横になって、わたしは彼女の肉体のあらゆる音を、牝鹿の魂のあらゆるわななきを、とらえた。わたしは、昨夜アニーのうちに聞いたように、牝鹿の、より湿った、まぶたの開く音や皮膚の皺がよる音や骨のかすかな音を、聞いた。わたしの同衾者の動きのひとつひとつに、動くからだの部分を示す狩猟職の高貴な言葉が、わたしの心に浮かんできた。同様に、アニーのはねかえり、彼女の休息、彼女の熱は、わたしのうちにやさしいあるいは粗暴な語を思ひおこさせたものだ。ときどきより長く、よりやわらかな音がしたが、それはアニーが壁布をなでているのだった、牝鹿が壁の面に吹いた硝石をなめているのだった。それが唯一の慰め、唯一のたよりであった。それから——わたしはその二つの行為に等価値を見いだせないのだが——アニーは泣き、牝鹿は自分のからだをなめた。わたしは手を、偶然のように、彼女のどくどくところに置いたが、むだだった、舌も言葉もわたしのほうへ逸れてはこなかった。夜はこうして、むなしい対決のうちに、過ぎていった。その対決からは同じ悲歎がおこった。理解や、結婚や、婚約や、男と雌とのあいだの手のなめあいなどの、同じ拒絶が。

そして、夜明けとともに、牝鹿は起き、逃げた。朝は夜よりもなおいっそう明らかにしたのだ、わたしが牝鹿でないことを、わたしの献身が意識的であり、わたしの憐憫が利己的であることを。わたしはドアにかんぬきをかけようとした。なぜなら、彼女は死に向かつて行くのだから。しかし彼女はわたしと正面衝突してしまった。わたしは取っ組みあわんばかりにして牝鹿と争った。金ボタンのついた青い胸をなめらかな白い胸にぶつけ、わたしは軍帽を、彼女のほうはびくびく動く耳を、頭にのせて。もし歳月に覆われた二本の大きな枝がわたしの額に突きだしていたら、もしわたしの軍靴の不器用な動きが飛ぶような足踏みとなったなら、もし突然大きく見開かれたわたしの目のなかに彼女が真実の愛を、真実の力を認めたなら、おそらく彼女は服従し、そうして大佐の銃撃を避けられたことだろう。大佐は突然現われて、彼女が逃げるのを見ると、彼女をフランスの牝鹿という彼女の運命に幸いにも連れもどしたのである……今朝またアニーは夜明けを待って出発した。彼女の決心は取り消すわけにはいかなかった。彼女は跳び起きた。もし、彼女が床から出るためにわたしをまたいでいるあいだに、わたしがひとこと、ただのひとこと言葉をかけていたら、おそらく彼女とはどまったことだろう。あるいは、もし、彼女が荷物を作っているあいだに、言葉ではなくても、ほんのわずかの真実のやさしさが、偽のやさしさがわたしの顔に現われたなら……またおそらく、もしわたしが牝鹿に対してしたようにドアに錠をかけ取っ組み

あいを演じたなら。しかしわれわれは常に人間に対するよりは人間の象徴に対するほうがやさしいものだ。わたしは開いたドアを離れた。すると彼女はその空隙から出て行った。が、抵抗がなかったわけではない。というのは、彼女は空隙から出て行ったにもかかわらず、わたしのなかを通って行くように思ったからだ。

いまは、九時であった。そこでわたしは内閣官房へ急がずに出かけた。急がずというのは、わたしがその秘書をしていたプロサール首相は、数日間ジュネーヴに行っていたからである。わたしの新たな状態が憂鬱を少しも伴わなかったといえは嘘になる。わたしは、もちろん、自分自身を再び見いだすためにわたしの生活を破壊したり、解散したりしたくはなかった。わたしはアニーと車と犬とがいっしょに出て行くのを見たらもっと満足だったろう。わたしの生活であり、そして多くの努力、怠惰、成功に傾いたあの小さな文明は、わたしの家出によるよりは彼らの四散によって崩壊したのだ。今日わたしのアパルトマンの上に落ちてきた埃の層は、ニネヴェやバビロンを覆っていた最初の埃の層と異なっている。明日もそれらの荒廢と異なるまい。わたしの治世の一つの埋葬だった。アニーの家出、それは奴隸たちの再分配だった。後悔がすでにわたしを襲った。疑いも。過ぎ去ったわたしの経験、わたしの解放を考えて、わたしはすこし謙虚になった。結局、率直に反省するなら、わたしの準備が一度として役に立つたことがないのをわたしは認めねばならない。い

つも、わたしが自分の運命を世代とか国とかもしくは時代とかの運命と一つにする手筈をととのえた瞬間に、運命はわたしをわたしの個人生活の頂点あるいはもっとも悪い末端に導いては、喜ぶのだった。たとえば戦争を考えねばなるまい。その戦争に、わたしはアダムが地上楽園にいたとき同様にかたっぱしで無一物のまま行ったり、また戦争のあらゆる意味は、わたしにとって、軍隊への出発一時間前にわたしの叔父を襲った中風症のために、失われていたのである。わたしには、やっと、その言葉と運動とを奪われた一種の生ける石柱を持ちあげるだけの時間しかなかった。そのあいだに、彼がさよならをいうわたしを見ることができるよう、彼の硬直した頭をわたしの両手で、一瞬支え、次いで、彼がドアを出て行くわたしを見ることができるよう、彼の頭を他の人の手にわたし、それからわたしは出発した！ 彼に聞こえなかったことは、彼に判らなかったことは、ほとんど確実である。実に無償で、司祭は四年のあいだ毎日石盤の上にわたしの伝言を書きにくれたが、しかし叔父はドアに視線を釘づけにしていた。目を動かすことができるという証拠を握られていたので、彼はドアから目をそらしたがらなかったのであり、ドアが開くのを待っていたのである。第二のドアである石盤の伝言板をおしてさえ、叔父はわたしを待っていたのだ。ドアはだんだん開かれなくなった。人は脇のくぐり戸から入ることによって、あるいは洗濯女のように窓をまたぐことによって、わたしの叔父の失望を避けようとした。

が、司祭だけは別で、勝利の日々には正面から入ることを固執した。人は春や夏の日に、庭に向かってドアを開け放ったものかどうか迷った。こおろぎが入ってきた、雌鶏が入ってきた。ある日わたしに実によく似た男がやってきたが、それは新しいポンプのための募金にきた制服の消防夫だった……みんなは、感動した。わたしの叔父がその男をわたしと間違えないほど、消防夫の制服と歩兵のそれとのあいだに相違があるだろうか？ ……そんなわけで、友人たちや生きている女たち、わたしの目の前で椅子からドアへ一跳びに跳んだり、床や寝台の上でとんぼ返りをうっては喜んだり、わたしの名前を千回もたてつけに呼んだりすることのできる、生きている女たちの荷物を、戦争とふたりだけになるために、すっかり捨てたにもかかわらず、わたしはもっとも悪い予備兵の水準にとどまった。この動かない唾のような肉体に対する氣遣いのために、また、六ヵ月か八ヵ月ごとの、だが記憶がこわれていたわたしの叔父にとっては一秒ごとの、周期で、家に連れもどされては、門の下をくぐらねばならないこの必要のためにである。叔父は休戦になってようやく死んだ。彼は一般人の戦争による最後の死者だった。この、生の、燈明の、模造品のために、あらゆる人にとって戦争というものが意味する熱狂と解放とは、わたしにとっては奴隷であることではなかった。準備のなかったわたしの友人たちが死せる英雄あるいは生ける英雄として出てきた大変動から、わたしは模範的な甥として出てきた……幸いなことに、よるめいたり、

赤くなったり、ばったり倒れたりする代わりに、アニーは今朝蒼くなり、反対に鉛錘線をがっかりさせるほどからだをまっすぐにし、反対に彼女の足を速めたのだった。ドアを出たのはわたしでなく彼女であった。事実わたしの視線は一瞬そのドアの上に釘づけになっていた。その一瞬はわたしに長く思われたが、しかしいまそれを叔父の五年に比べれば、ごく短かったことを認める。わたしの自由は確保されていた。半身不随になり無感覚になったアニーのほうへ半年ごとに帰る必要はないのだから。彼女は鞆をもって走って行ったことだし、彼女はタクシーの中で、いやたぶんバスの中で、苦しんでいることだろうから、わたしは自由に、一人で、役所に出かけた。なんという素晴らしい仕事だろう、この朝のためにわたしが予約しておき選んでおいた訪問者、ベネシュとかリュオーテ元帥とかアインシュタインとかを迎えることは。彼らはこの新しい人生の上に輝くわたしの名づけ親である！わたしは彼らがすでに取り次がれているかどうか尋ねた。彼らはすでにそこにいた……

いや。女がひとりわたしを待っていた。ただ女がひとり。

わたしは女たちのことをすっかり忘れていたので、犯罪現場からもどってきて、自分の控え室に警察官が幽霊を見いだす犯罪者のような気になった。アニーでないことは確かだっ

た。アニーがわたしのほうへ帰ってくるのは、絶望が、次いで怨恨が、次いで無関心が作りだすことのできる距離だけすっかり遠ざかった後のことである。憔悴し涙によって蝕まれたあのアニーの顔、それをわたしがもう見ることはあるまい——二年後、三年後、おちついて満足した顔をしか。しかし、キュリー夫人あるいはバルギーの女王でなければ——ない？ 彼女らではない？ ——それはアニーのある変装したすがただった。公のそして陰險なこまぎれの歎願によって彼女の長い歎願を続けにわたしの傍へやってきたアニーのである。寡婦^{ドワイ}となった、わたし以外の男の寡婦となった、アニー。労働監督官となったアニー。アニーを傷つけることによってわたしが他のあらゆる女性に害を加えたことを、わたしに思い起こさせにきた、一連のアニーたち。寡婦たちが飢え死にしかけているのは、あるいはセーヌ川の保護施設の不良少女たちが反抗して、かけつけた司直の男たちに彼女らのお尻を見せたのは、わたしがアニーをなおざりにしたからである、ということと彼女らの存在そのものによって、しかもより普通の推論の方式にたよらずに、わたしに証明しようとするきになっているアニーたち。だが結局、わたしは彼女らがぜんぜん間違っているわけではないのを感じた。わたしにおける愛の欠如は、わたしがすでに知っているある矛盾によって、愛がひき起こしうるあらゆること、つまり、愛された夫のやもめ暮らしとか貧民救済所の娘たちの無軌道ぶりとかの、責任をわたしに帰した。毎晩わたしがアニーの上に跳びかか

ついていたころでも、純粹で、無垢で、非物質的なものすべてへの父性愛が一日のあとの時間にわたしに帰ってきたのだから、純潔と肉への恐れとのなかで彼女といっしょに暮らしていたときに、わたしが肉体のあらゆる卑俗さとそのあらゆる卑猥さを報告しなければならなかったのは論理的であり当然である。わたしが再び彼女たちの一人をわたしの爪や膝やまた唾液で攻撃しないかぎり（その攻撃は再び彼女たちの目にわたしをランスの天使やラファエルの画やウエルテルやドミニックの作者にすることだろうが）、彼女たちが自分たちへの輕蔑と考えるあの彼女たちからの孤立のうちにわたしが生きていくかぎり、女たちにもう、絹靴下の製造者の良心の欠如や売春やまた纖維腫などでわたしを非難することを委任された、ある秘密団体でしかなくなるだろう。わたしはその訪問者がこの恐喝の最初の代表者であると考えた。ところが、ドアが開いたとき、わたしは自分が女たちの連帯責任についてあまりにも高すぎる考えをもっていたのを理解した。その無邪氣な顔を見ていっさいの疑いが消えた。彼女は、女たちを裏切りにきたのであった。

これ以上あからさまに女たちを裏切ることはいできない。すなわち、彼女は二十歳だったのである。アニーとわたしはじめて出会って、彼女もまた彼女の姉妹たちを裏切り、わたしが甘くやさしくて、すこしでも残酷なあるいは利己的な動きはいっさいできなかった六ヵ月前に、アニーがわたしにいったあらゆること、それをこの女性もわたしに言いにくた

だということがわたしには最初の一瞥でわかった。そして今度もそれは真実だった。彼女はそれをただアニーより輝かしい若さと美しさでもって言い、若さと美しさとはその確かさをわたしのうちで強めた。彼女は毛皮も重たくすることができない上半身でそれをいった。手袋をはめた手と裸の手とでいった。すべての女性を結びつけている紐を彼女が切ったということを証立てる彼女の胸の周りの金の帯でいった。その後啞になるか嘘つきになったアニーの上のあらゆるものによって、皮膚によって、ピロイドによって、いった。そして彼女の上にまた傍にあるすべてのものはこの真実に同意した。彼女が口を開く前の、彼女のまなざしの一つ一つが、彼女のしぐさの一つ一つが、またその唇そのものが、わたしのうちに見抜いた女たちに対する献身への賞讃であった。わたしが彼女らについて抱いている理解への、そして同時にわたしが彼女らにとって意味している危険への、賞讃であった。彼女の微笑、彼女の熱心さ、彼女の嬌態、ややおずおずしてはいまいな彼女の言葉は、彼女が現われた瞬間から、世界がもはやわたしの無関心とかわたしの輕蔑とかの公理ではなく、わたしの寛容さややさしさや大胆さの公理で生きていることを、証していた。わたしは物でいっぱい机のうしろにいた。彼女のほうは書類と本とのあいだにやっとわたしの顔を認められるだけだったが、わたしには、アニーの過ちを納得し、わたしの潔白を納得して、それを急ぎこんでわたしに告げようとしている彼女の全身が、見えた。そのあらゆる反射、そ

のあらゆる震え、そのあらゆる輝きでもって、それはわたしの弁護人であった。それはわたし自身が信じかけていたあの魂の欠乏感からわたしを解放してくれた。それはその脚を組んだりほいたりした。それはついにはその胸まで見せて、この机への、この庭への、これらの物たちへの、そしてその態度が先刻までは疑わしかったこの自然への、わたしのうなる信頼を、ともにしてくれた。わたしの使徒にはかならずこの完全な身体を前にして、涙がわたしの目に浮かんできた。この身体、それはひとつの証であった。

彼女の言葉がいったことは彼女の身体がいったこととそれほど違つてはいなかった。彼女はジャン・シュートーの代わりにわたしに会いにきたのだった。このテリとアルゼンチンとに住んでいた年老いた友は、彼女にわたしのことを語り、彼女がヨーロッパへ行くときはわたしに彼の思い出をもたすことを彼女に約束させたのだった。彼女はくるのに遅れた。シュートーは十年前に死んだ。彼女自身はそのとき十三歳だった。そして十年間わたしに会うことができなかった。とはいえ彼女は会おうとは試みたのだった。少女として、次いで若い娘として。彼女は九年前に葉書を一枚わたしに送った。もう一回は、五年前、ピアリツツのカジノで、わたしをスピーカーで呼びだすことを突然思いついた。もしわたしが偶然部屋にいたらなんという奇蹟だろう！ スピーカーはわたしのところまでとどかなかった。だが、葉書はたぶんついた。雪から出ているラマの頭を表わし、ノレナ・パッツと署名さ

れた一枚の葉書は。今日は結婚した女性としての試みだった。彼女は今朝目が醒めたとき突然に決心したのだ、わたしのところへくることを、パリを横切り、フランスを横切つてわたしを探しだすことを。三歩しか歩かなかったことに彼女はまだすっかり驚いていた。まだすっかり息を切らしていた。

わたしはマレナをみつめた。こうして、アニーがああ疲れきった陰気な、年の判らぬ男のもとを去る決心をしたときに、この若い女はこの燃えるような、大胆な、強壯な男のほうへくる決心をしたのだった。わたしはそのことに感動した。が、まだ、警戒は解かなかった。なぜなら、その二人の男のあいだの完全な相違は確実だとしても、その二人の女のあいだの相違はそれほど確実ではなかったからである。わたしはアニーとの経験を再びはじめる気はなかった。感じやすくなすることは苦しいものだ。雪から出たラマの頭や、わたしを呼びだすための急を報じるピアリツツのスピーカーは、たしかにかなり喰いつきたい餌ではあったが、しかしまだ、マレナの顔をみつめ、マレナの声を聞くことによって、アニーがその仮装の下にはいりこんでいるのではないか、また、ありそうなことだが、わたしにとって女というものがみなアニーになるのではないか、それを確かめねばならなかった。数ヵ月後に薄められたアニーか濃くされたアニーかがこの新しい外見の背後に再び形造られることはないというのを、この女がわたしに証してくれなければならないのだ。いずれ判るといふわけにはいかない。すべてがわたしにとって今日から

始まることだってあるのだ、もしそれが再び始まるというのではないなら。それゆえ、わたしはこの訪問客のうちに彼女を唯一の女にしていけないものをすべて捉えようと試みた。新しいこの微笑や眼差しや香水と、あの微笑や眼差しや香水の中央の泉（そこからアニーとその前のアニーたちがみんないつも汲んでいたことをいまわたしは気づいたのだが）とに近づき足りないかどうか、見ようと試みた。この陽気さや信頼は、わたしがはじめてアニーに出会い彼女もまたすぐ前のアニーを裏切ったあの晩のアニーの陽気さや信頼に似ていないかどうか、たしかめようと試みた。あの晩彼女はすぐ前のアニーと正反対のものであったのに、今朝は彼女がそのアニーに似ていたことにわたしは気づかないわけにはいかなかったのである。だが、わたしの試みはむなしかった。この顔つきの一つ一つ、このしぐさの一つ一つは、わたしの過去をすべてゆきぶつたが、しかしわたしの思い出は一つとして動かされなかった。創造の、わたしの創造の、新鮮さは、この若い女の上にあった。たとえ、彼女が同じ名をもっていたとしても、彼女がアニーと呼ばれたとしても、このアニーは他のアニーとなんの係わりもなかった。心のなかでわたしは試しにアニーの名を彼女に向かつていってみた。アニーの名はふたたびすばらしいものになっていった。それはもはや歎きでもむなしい愛撫でもなかった、それは招いていた。それは、かつてアニーという名から悼ましくもひとつひとつ落ちていった、可愛がるとか愛するとかいう動詞から派生したあのあらゆる形容詞をふたた

びもっていた。それは最初の文字から、文字の最初から、ふたたび輝いていた。それはアニーのあの無益で明白な永遠性への、アニーがそれを体現しその総体となっていた女性というもののへの、捧げものではもはやなかった。それは、あの孤独で移ろいやすい存在に対する挑発であった。その見かけだけは運命への挑戦であるが、しかしいかなる怖れもいかなる憐憫も呼びささないあの孤独で移りやすい存在に対する挑発。幸いなことに、わたしはついに憐憫から自由になった。無慈悲なわたしは、自分があらゆる愛情、あらゆるやさしさ、あらゆる慰めをすでに待ちもっているのを、感じた。

事実、わたしは女たちをただ驚嘆をもってみるだけであつた！ わたしは彼女たちがいまひとりの女が死ぬやいなや、かかる迅速さをもって、かついきいきとやってくるということに驚嘆した。アニーの灰、すっかり冷たくなった身体のみだあたかな灰の上に輝きだし、荒い息をしているこの若い不死鳥に驚嘆した。この率直さに比べれば、二つの恋愛や二つの愛情のあいだに喪の余白をおくことを義務と考えている私たちの偽善がいかにもしみわたれたものに思われた。わたしはアニーの死にまさに大きな余白を予想していたのである。世界全体とその転覆といった余白を。わたしのつもりでは、ついに平和になったヨーロッパでしか、ふたたび自動車と草刈り機とを売りだしたアメリカでしか、天国でしか、二度と愛しはじめるべきではないと思っていた。わたしは誠実に、わたしが次に愛する女性を、平和になるまで、豊かになるまで、

みなが幸福になるまで、とうもうこしとゴムを自由に栽培できるようにするまで、遠ざけたのであった。わたしは誠実だった。が、アニーはわたしの誠実さなぞ信じなかった。彼女は、わたしが彼女を愛さなくなったのは彼女のうちにもはや愛するに足るだけのものを見いださなくなったからだ、と單純に思いこんでいた。わたしは慰められたらすぐにもう彼女以外の女を愛するだろう、と彼女は確信していた。わたしは、女たちへのわたしの情熱によって女たちへのわたしの愛想づかしを説明しようとするアニーの頑固さにいらだった。恋敵がいるというアニーの信念は、事実、我慢のできない女の思いあがりであった。なぜ彼女はわたしの誠実さを疑うのか？もしほんとうにひとりの女がわたしの生活のなかにいなければならぬと決まっているならば、変えることはないではないか、彼女でいい！だからこそわたしがとどまっていたことに彼女は気づかなかったのか？わたしは女にうんざりして彼女といっしょにとどまっていたのである。というのも、習慣や情愛や安易さが、他の女とはもはや想像さえもしない共同生活を耐えやすくしてくれたからであり、アニーの脚や顎や耳が、わたしがもうどうしていいか判らないあれらの何百万という脚や顎や耳を隠してくれ、それらからわたしを解放してくれたからである。だが、それこそがまさしくアニーの信じたくないことであつた。彼女の誇りは、自分がわたしのためにあらゆる女たちを摩滅させたと考えることを、彼女に禁じた。彼女はわたしが愛さなくなる世界で最初の女になる

よりは、わたしが愛する世界で最後の女になることのほうを選んだにちがいない。だから、彼女は、自分の唯一の頼みの綱あるいは自分の力の最後のしるしにしがみつこうように、自分の失寵にしがみついていたのだ。彼女はわたしが彼女に對して保っていたこのみじめな忠実さを、忠実さとしてではなく、みじめなものとして、強制として、欺瞞として、受けとった。彼女の人生のうちにわたしをひきとめていた怠惰と憐憫とのなかに、彼女の自尊心は、わたしを彼女からひき離すための恐るべきたたかいと無限の残酷さを見ることを、彼女は強いた。もし、彼女が全女性に無関心なわたしを、全女性から解放されたわたしを、後に残していくのだと考えたら、事實はわたしは極度にそうだったのだが、今朝彼女はけつして出て行かなかっただろう。出かけてから一時間後にわたしたちの部屋へ忘れ物を取りにもどって、わたしの肘掛け椅子のなかに、わたしの腕のなかに、まだ乱れたままの彼女の寝台のなかに、彼女の後がまの女を発見したとしても、彼女は驚かなかったにちがいない。彼女はそれほどまでに頭にきていたのだ。それほどまでに頑迷だったのであり、それほどまでに真実から遠くにいたのだ。だから、たとえこの事務室に入ってきてわたしがマレナといっしょにいるところを見つけても、彼女は事實を、説き明かしえぬ符合を、奇蹟を見ないで、ただ彼女が予想していたことのあつけない実現を見るだけだろう。彼女の出発と同時にわたしがとびこんだこの自由な流れを信じようとはしないだろう。その流れの向こう岸にわたし